

ポイント
・保護主義に対する国民の「抵抗力」高まる
・生産者意識強まると自由貿易に否定的に
・グローバル化にらみ、政治の役割重み増す

久米 郁男 早稲田大学教授
直井 恵 カリフォルニア大学
サンディエゴ校准教授

今回の世界的な金融危機を機に、世界経済は同時不況に突入しつつあるように見える。一九九五年からの世界大恐慌では、各国が国内雇用を守るために輸入制限を強め保護主義に走り、さらにプロテクトクイズを進め、第二次世界大戦に至った。世界貿易機関(WTO)での交渉の停滞や、世界規模で拡大しているかに見える反グローバル化運動は、悪夢の再来を懸念させる。果たして自由貿易への政治的支持は、グローバル化の進展

経済教室

した現代において、どの程度安定したものであろうか。

この点について国際政治経済学は、貿易の拡大が国内政治に及ぼす影響を分析してきた。すなわち、貿易がどのように雇用や所得に影響を与え、その影響に対する人々の反応が職業(とくにどう異なるか)という点

が関心の対象だった。いわば生産者としての「利益」に注目したもので、この職業的屬性を重視する傾向は、近年欧米で注目を集める、世論調査を用いた一般有権者のグローバル化への態度を分析する研究でも引き継がれている。しかし、人々は自由貿易に対する態度を、職業的利益だけで決定しているのではない。自由貿易によって安価に多様な商品が購入できるという消費者としての利益が、

消費者利益今こそ訴えよ

自由貿易への支持を生じ、問われるべきなのは、人々が職業の観点だけでなく、「消費」の観点から自由貿易を見た場合に、自由貿易への政治的支持にどのような相違が生じたのかを調べる必要がある。

「マーケット」などの写真を見せた回答者のグループ(「消費者」グループ)、生産者としての意識を喚起させた回答者のグループ(「生産者」グループ)、そして何も見せなかった統制グループ(「中立」グループ)各四百人に、自由貿易に関する質問を答えてもらった。生産者としての刺激を与えた場合と消費者としての刺激を与えた場合、人々の自由貿易への態度はどの程度異なるのかを知るためである。

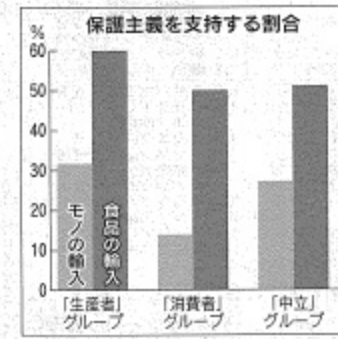
生産者偏重でゆがみ バランス取り意識喚起

下表は、概して悪いことだ」という意見のどちらが近いかを尋ねたところ、「生産者」グループが「中立」グループより後者の意見を過半数で選んだ。一方、消費者意識を喚起させても有意な影響がなかった。生産者としての意識を刺激されると、人々は貿易が雇用や資金に与える負の影響に敏感になり保護主義的になるかといえる。

否定的になるのだ。我々の調査では消費者刺激を与えても食品輸入に反対する比率は上がったという。消費者は食品の安全問題に敏感になり、いざというに保護主義に走ることもなく、冷静に対応しているように見える。他方興味深いのは、生産者意識が食品に対する保護主義的態度を強化していることだ。

さらに興味深いのが外国人労働者の増加に対する態度である。「近年、日本で働く外国人が増えている」といって、意見を問うたところ、「中立」グループでは、保護主義や非正規労働者が、外国人労働者の増加に対して否定的な態度をとる。しかし、これらの人々は消費者意識が刺激されれば外国人労働者に肯定的な態度を持つことが分かった。とりわけ外国人労働者と雇用をめぐって競合関係に立つ可能性が高い非正規労働者が、消費者意識を喚起されると外国人労働者に肯定的な傾向があることは、消費者意識が自由貿易を超えて、人

高所得の人は自由貿易を支持する態度を強め、仕事の上で外国との取引のない人は逆に保護主義的態度を強めた。次に、食品の輸入に対しては、消費者意識が刺激されると、子どもを持つ親の自由貿易支持の態度が強まった。我々は子どもを持つと安全な食品を志向し輸入食品品には否定的になると予想していたが、安い輸入食品を歓迎することに変わらなっている。他方、生産者意識が刺激されると、中高年や今の仕事を辞めたいと思っている人の保護主義的態度が強まった。食品の輸入が増えても、こうした人の雇用にたぐいに影響はないように思われるが、生産者意識を刺激されると潜在的な雇用不安が想起され、食品輸入拡大のおおりに受けて国内食品の生産が減るとの連想も起き、保護主義的な態度を強めるのかもしれない。



くめい、くお 57年生まれ。東京大学、コロンビア大学政治学専攻。専門は政治学。なほい、めい、73年生まれ。慶応大学、コロンビア大学政治学専攻。専門は政治学。